作家「明」の視点

『根付は自由の象徴』

「ヘッドスライディング」 高4.5㎝

●制作する際の信条をお聞かせください。

簡単に言えば、物作りは楽しいということでしょうか。信条というほどではありませんが、出来不出来はともかく新しいことに次々と挑戦していくことで、ローリングストーン、変わり続けることです。
根付は日本独自の文化で、世界でも類を見ません。そんな独特な味わいのある工芸に惹かれる思いはあります。用の美である工芸には制約があるもので、そこに魅力があるのですが、根付を成り立たせる制約のなかで、今を表現することを大切にして、自分の思うままに自由な作品を作るよう心掛けています。

● 根付制作の愉しみを教えてください。

根付として成り立つための制約がひねり、あるいはアイロニー等を引き出し、独特の造形を生み出していきます。そうしたアイデアを考えたり、それを作品にまとめたりする制作過程がとても楽しいです。いろいろな切り口があり、無限に楽しめるような気がします。
根付にはそのような懐の深さがあるように感じます。

黒岩 明（くろいわ あきら）

1949年東京都出身。ジュエリーデザイナー、漆芸家を経て1992年より根付の制作を開始。彫金・漆と幅広く工芸に通じ、新しい素材を積極的に使いながら現代の事物をテーマにして創作している。

10月～12月の特別企画展のご案内　「阿国」に連なる伝統文化　根付最新作が一堂に

次回特別展では日本文化の継承と挑戦の中で生み出された最新作に焦点を当てます。いくつかの日本文化の端緒は16世紀後半の安土桃山時代、出雲の阿国（おくに）にまで遡ることができます。四条河原でのかぶき踊りは、傾（かぶ）いた衣装に、たくさんの提げ物で加飾をして、台詞を採り入れた寸劇で踊ったとされ、後世には歌舞伎、根付、小唄へと発展する契機となったとされます。京都の地で生まれた文化が脈々と引き継がれてきた伝統を、現代作家による最新作で特集します。

粋といなせと、艶っぽさ
10月 〈小唄〉展　■ 10月1日（金）～31日（日）

栄冠へ。甲乙つかぬ力作揃い
11月 〈秋の名品〉展　■ 11月2日（火）～30日（火）

隈取り、大見得、人情味
12月 〈歌舞伎〉展　■ 12月1日（水）～29日（水）

京都 清宗根付館　公式ホームページのTwitter、Instagram にて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第9回 水木十五堂賞受賞（奈良県大和郡山市より授与）
家庭画報 2月号に掲載、NHKプレミアム「美の壺」出演

◀公式サイトはこちらから

コロナウィルス感染症による感染拡大防止への取り組みに関して

- 入館時にスタッフにより、非接触による検温と手指のアルコール噴霧をいたします（37.5度以上の発熱がある場合は、入館をお断りさせて頂く場合がございます）。
- 万が一、コロナウイルス感染者が発生した際の対策のため、入館時に住所・氏名等のご記入をお願いしております。
- マスクの着用にご協力をお願いいたします。当館スタッフもマスク着用で業務にあたらせていただきます。

公益財団法人 京都 清宗根付館 とは

当館は、佐川印刷株式会社 代表取締役会長CEO 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね（宗）とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、<魅せる><育む><繋がる>を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。

SAGAWA PRINTING　佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。

宗 現代根付 Contemporary Netsuke Newsletter Salon

SUMMER ~AUTUMN　Issue. 05

［目次］

■ 企画展の見所
■ 清宗根付館便り
■ 根付研究最前線
■ 作家から見た根付

［発行元］
公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地（壬生寺東側）
電話 075（802）7000
www.netsukekan.jp/

日本で唯一の現代根付専門美術館　京都 清宗根付館『企画展』のご案内

ふれあえる明日への望み〈共生〉展

平穏泰平な世の中は誰もが望むことであり、それは人類が始まってから変わることのない崇高な理念です。歴史の中で繰り返されてきた戦争や疫病の蔓延など困難と恐怖の時代を乗り越えようと人々は平和を希求してきました。平和とは普段暮らしている「日常」を取り戻すことであり、常に求めなければ得ることはできないことを、現在の世界的な混乱の中にいる私たちは実感しています。
平和学の父と言われるヨハン・ガルトゥング（Johan Galtung 1930～）によれば、平和は大きく2つに分かれます。暴力や戦争がない状態を指す消極的平和（negative peace）と、共感をもとにした協調と調和がある積極的平和（positive peace）とされます。

一人ひとりが考える平和や社会に求められる平和は解釈が異なりますが、当館では協調と調和の中にこそ共存があると考えます。また平和への願いは文化を育て、伝統を継ぐことも意味します。様々な時代をくぐり抜けながら、時代を映しだしてきた根付には個人を尊重し、平和を願う文化的背景を読み取ることができます。豊かな想像力によって創作された根付は新たな活力の発見へと皆様を導くことでしょう。
本展では『共生』と題し3つの視点から、気鋭根付師たちの平和への想いを込めた作品を通して、共に生きることの意義を見つめなおします。

告知ポスター

7月～9月　企画展の見所

7月 ■ 7月1日(木)～31日(土)

競い合う喜び

〈スポーツの祭典〉展

世界の頂点に立つ競技者が一堂に集まり、フェアプレーの精神を高らかに謳歌する「スポーツの祭典」。トップアスリートがしのぎを削る幾多のドラマは、世界の人々に感動と興奮を与えてきました。スポーツを通じた平和と平等の実現を願って、本展に合わせて現代作家が新たに創作した作品を一堂に集め、もう一つのスポーツの祭典を開催します。

「韋駄天」 高4.9cm
及川 空観(1968～)

「伝統と革新」 高4.9cm
宍戸 壽雲(1960～)

「東京ゴリン」 高4.2cm
池田 朝重(1972～)

8月 ■ 8月1日(日)～31日(火)

穏やかに安らかに

〈安息への祈り〉展

世界的な疫病蔓延の収束を願い、謙虚な祈りを込めた作品を特集します。根付は留め具としての実用性だけではなく、作り手の祈願や愛情を象徴する依り代として深い精神性を宿しています。それによって人々に寄り添い、心を通じ合わせることができるのでしょう。親しみと安らぎにあふれた作品たちに明日への祈りを託します。

「平和への祈り」 高4.5cm
山本 伊多呂(1961～)

「四睡」 高4.2cm
伊藤 滋女(1963～)

「祈凰」 高5.9cm
平賀 胤壽(1947～)

9月 ■ 9月1日(水)～30日(木)

感謝をささげて

〈日本の祭り〉展

八百万の神々に守られてきた日本の祭りは呪術的、宗教的な神事が起源とされます。古事記(712 年) に記された天岩戸隠れには災難や疫病を克服するために祈願をささげる「日本の祭り」の原形を見出すことができます。現在の祭りは季節を彩り、人と地域をつなぐ伝統行事となっています。各地に伝わる祭りをかたどった根付を紹介します。

「おけさ猫」 高4.1cm
宮澤　彩(1949～)

「祭り」 高5.4cm
青木 光行(1932～)

「花火」 高3.7cm
田神 十志(1957～)

※掲載の根付は原寸サイズです

根付研究 最前線

「留具の発生を読み解く」

公益財団法人 京都 清宗根付館
学芸員　大西 忠雲

これより、根付に先立ち使用されていたと措定できるリング状の小器具である根付の原状（以下、留具）の発生について、一つの可能性を探ってみたいと思います。小考では、対象と同時代に記された文献史料と絵画資料を優先します。もちろん、後に記された史料が史実を伝えている可能性は否定できません。しかし、後に記された史料には、推測された当時の考え方や風俗、また、ある史実が伝わる間にさまざまな要素がそこへ入り込んでしまい、新たな「史実」に変容している可能性が否めません。いずれにせよ、同時代の両資料を優先し、加えて、他分野の研究成果を援用しつつ、筆者の視点から当時の社会像を復元し、この社会の潮流の中で留具の発生を捉えてみたいと思います。

ところで、元来、筆者には素朴な疑問がありました。それは、袋物を佩用する際に留具は本当に必要なのか、というものです。何かを携行させる容器がポケットでなく袋物であったとしても、なぜ着衣に縫い付けてしまわなかったのか。あるいは、何かに直接からげてしまえばこと足りなかったのか。換言すれば、なぜ着衣と容器との間に媒介=留具が必要だったのかという疑問です。この点がまずもって、筆者が考察を進めていく立ち位置です。

とはいえ、留具が袋物を提げる際のストッパーの役割をはたしていることから、まずは、留具の先にある袋物の佩用に着目してみたいと思います。なお、腰元に装飾品を提げるという古くからの慣例として、唐［618 ～ 907］の制度に倣い、官人が朝廷に出仕した際に、出入りする際の証契（通行書）であった魚袋（ぎょたい）という装飾品を佩用した例があります。むろん、魚袋が佩用した者たちの「我々」という意識の紐帯を醸成する一つの仕掛け（装置）であったという点は、この後の考察で大いに参考になると考えています。しかし、この魚袋の佩用に、その後の留具が発生する要因なり誘因を探るには、魚袋が今日でも留具を必要としていないことからも、無理があるように感じます。

さて、袋物の佩用について、歴史学者の保立道久氏は、中世の「民衆」・「男」の身なりにつき、腰刀と袋のどちらが欠けても「一人前」の証拠に欠けると見なされた、と指摘します。この指摘は、袋は必ずしも実用があって腰刀に吊されるだけのものではなく、「民衆」「男」としての表象、つまり、袋が佩用者の社会圏における特定のメッセージを帯びていたがゆえに佩用されていたことを示唆します。稿を改め、この指摘を援用しつつ、袋物の佩用の記載（描写）が散見しだす中世［1185 ～ 1573］の両資料から、袋物の佩用の有様を検討することにしましょう。

<参考文献>
保立道久「腰刀と桃太郎」『月刊百科』NO318 平凡社1989

清宗根付館 だより

NHKテレビで当館が紹介されました

普段使いの器から家具、着物、料理、建築に至るまで、人の暮らしを彩ってきた美のアイテムを取り上げ、鑑賞法などいくつかの「ツボ（押さえどころ）」を解説するNHKテレビのアート番組「美の壺」が「手のひらのアート 根付」をテーマに番組を制作されました。

3月８日に制作スタッフが当館に来訪され、「京都にある日本最大の根付専門美術館をご紹介」として、館内の展示品を撮影された後、木下館長のインタビューを収録されました。

その模様はNHK BSプレミアムにて４月９日午後７時 30 分より放送（4月17日朝にも再放送）されました。番組の中で、木下館長は 360 度どこから見ても楽しめる根付の魅力について語り、現代根付作家の代表として及川空観氏や道浦道甫氏の制作の様子も紹介されました（写真は当館での撮影の模様）。